

※H.P.上では、200%位でみてください

新たに知った2つのこと、そしてこれから…

～現職の教職員へ～

東京都教職員組合 専門委員

田倉 孝衛

2022年9月23日～24日、全教主催「被災地を見る・歩く・考える」行動に参加した。東日本大震災・東京電力福島第一原発事故から11年が経過した現在。多くの人が故郷に戻れず、元の生活ができない状況が続いている。

今回、この地を訪れ、新たに知ったことは2つ。

一つ目は、原発稼働以来、小さな？事故が度々発生していることを伝言館に訪れた時、知った。無知だった。そして、知らされていないなかったというか、知ろうとしなかったか。

再循環ポンプ振動計が振り切れた警報無視の運転
1989年 福島第二原発3号機

福島第二原発3号機(1989年)
1月1日 再循環ポンプの振動計振り切れ警報が鳴る(2月23日まで鳴る)
1月5日、現地に常駐の国の運転管理専門官に報告
1月6日 振動計再び振り切れ、警報鳴る。専門官も原子炉停止など指示せず運転継続
1月7日 定期検査のための原子炉停止 この間14時間、警報を無視して運転

東京電力、「表の顔」と「裏の顔」

- 私たちの生活や産業にとって「電力」は欠かせない。国民生活に必要な電力を支える基幹産業としての電力会社の重要性は言うまでもない。
- しかし、福島原発を通じて向き合ってきた東京電力の姿は、「表の顔」の一方で、鉄面皮な「裏の顔」をさらけ出していた。
- 原発に批判的な住民世論に敵対し、原発の事故情報について真実を隠し、時に意図的にウソをつく姿は、私たちから見れば、「奸智術策」を弄する倣岸な姿にしか映らない。
かんじゆつさく とうがらん
悪知恵と陰謀 おごり高がる様

※伝言館には、こういう掲示(写真)がたくさんあった

二つ目は、若松丈太郎さん(故人)という詩人のこと。

若松さんは、1994年にチェルノブイリ原発事故の現場を、今回、同行説明をされた伊東達也さんたちと訪れ、帰国後に詩「神隠しされた街」を発表している。東電福島第一原発から25キロの距離ある福島県南相馬市の「緊急時避難準備区域」に住み、50年前から原発の危険性を訴え続けてきた詩人(元高校国語教員)。

この連詩の一部は、

千百台のバスに乗って／プリピャチ市民が二時間のあいだにちりぢりに／近隣三村あわせて四万九

千人が消えた／四万九千人といえ／私の住む原町市の人口にひとしい／さらに／原子力発電所中心半径三〇kmゾーンは危険地帯とされ／十一日目の五月六日から三日のあいだに九万二千人が／あわせて約十五万人／人びとは一〇〇kmや一五〇km先の農村にちりぢりに消えた／半径三〇kmゾーンといえ／東京電力福島原子力発電所を中心に据えたと／双葉町 大熊町 富岡町 楢葉町 浪江町 広野町 川内村 都路村 葛尾村 小高町 いわき市北部／そして私の住む原町市がふくまれる／こちらをあわせて約十五万人／私たちが消えるべき先はどこか／私たちはどこに姿を消せばいいのか／事故六年のちに避難命令が出た村さえもある／・・・

30年近く前の詩。彼の詩が、17年後に現実となった。

それなのに、国も、電力会社も、私も何もしなかった。

今回の行動で、私がこれからも続けていかななくてはならないことを考えた。

学校という場にいた時。追体験や絵本・史実を通して子どもたちに「15年戦争、の実相を伝えてきた。

しかし、原発事故・事件は追体験ではなく、自身の体験として語ることができる。そして、具体的には、

①3.11を忘れない。そのためには、毎月の11日を「原発事故」の日として、意識づける。

②3.11で大きな被害を受けた東北地方では、震災遺構としての建造物が建ち・整備されているが、その中味を知り、未来につながるよりよい物になるよう微力だが働きかけるとりくみに参加する。

③ウクライナ戦争で、エネルギー危機が作り出され原発の『復権』がはかれようとしている。しかし、原発の危険性は何も変わっていない。原発ではない再生可能エネルギーへの転換のとりくみに参加する。

④もう教員としての仕事はしていないが、もし、教室にいたら、「3.11関連」の絵本がたくさん出ている。読み聞かせをして、子どもたちに伝えていきたい。しかし、これは、難しこと。現職の教職員にお願いしたい。

そんなことを考えさせられる行動となった。

9/24の行動は、

▽**ヴィレッジ(車窓)**…何事もなかったようにサッカー練習をしている子ども、大人と同伴者がたくさんいた。原発事故がなければ…。

▽**初めて行った「伝言館」**…福島県楡葉町大谷の宝鏡寺境内。在野の目線で事故の被害や教訓が伝わってくる。早川住職のお話とともに、ここでの見学は、原発そのものとともに国・東電の原発情報の隠蔽体質を知ることができた。

▼**国道6号線沿いの帰還困難区域(車窓)**…車等が入れないようにバリケードが依然たくさんある。まさに、「神隠しされた街」である。車中でも放射線量2mSv近くあり、場所により針が振り切れる状態。



※**国際放射線防護委員会(ICRP)**による勧告値(1990年)は一般人に対し1年当たり1mSv(ミリシーベルト)、放射線業務従事者に対し特定の5年間の平均が1年当たり20mSvとなっている。

▼**双葉駅(車窓)**…きれいになっていた。しかし、駅周辺には人影はなかった。

▽**初めて行った「伝承館」**…H.P上では、「…展示や語り部、研修、調査・研究を通じて、未曾有の複合災害について福島で何が起き、どう向き合ってきたかを伝え、防災・減災に向けた教訓を国内外や未来へつないでまいります…」とある。『復興』にむけてのアプローチはわかるが、原発本来の恐ろしさはどうなのだろうか。きれいにまとまりすぎている感



あるが、数時間の滞在時間は必要だ。

※**原子力明るい未来のエネルギーの看板(双葉町)**。15年11月実物撮影。この看板は、今はおろされ伝承館に写真として保存されてあった(左・下段写真)

▼**数度訪れた「請戸小」**…東日本大震災の脅威や教訓、地域の記憶や記録を後世に伝え、防災意識の向上に役立てるため震災遺構として一般公開。以前、訪問したときは遺構ではなかった。もっと、生々しさを感じたことを思い出した。H.P上では「震災遺構として整備・保存し、防災について考えるきっかけ…」となっている。展示の立ち位置が、当時の自身の感覚とのズレなのだろう。



※**15年11月撮影。**



※**今回、撮影。**下段は、壁から引きはがされた複合盤「…各室の時計や…一括管理していた複合盤はむき出しになり、傾いたまま機能停止…。構内に残っている時計は、すべて15時37分を刻んだまま停止」と。



※**17年11月撮影。**時計は15時37分で停止。



今回の行動で感じたこと。行政設立の震災関連遺構等は、「未来への継承・世界との共有」「防災・減災」「復興の加速化への寄与」などであって、今回の事故に関して、明確な決意が感じてこなかった。つまり、原発をどうするかが伝わってこない。そのことで、自己感覚とのズレを感じた。もちろん、展示物の個々は、十分考えられるものがたくさんあること自体は否定しない。しかし、原発エネルギーに依拠することの危険性を考えれば、原発ゼロ政策への転換こそ必要なのだ！と強く実感させられた。

どちらにしても、現職の教職員の方に、一度は“フクシマ”を訪れて「見て・歩いて・考えて」、自分なりの考えをもってもらえれば幸いだ。